

美人が多い福岡の「お・も・て・な・し」

1908年3月5日、日本で初めて一般女性を対象にしたミス・コンテストの結果が発表された。審査員は彫刻家の高村光雲、歌舞伎役者の中村歌右衛門らそうそうたる顔ぶれだった。約7千の応募写真の中から1位に選ばれたのは福岡ゆかりの女性だった。旧小倉市（現北九州市）の市長の四女で学習院女学部にて在学中の末弘ヒロ子（16）である。

ヒロ子を引き合いに出すまでもなく、「福岡は美人の宝庫」という意見に異論を挟む人はまずいない。美人が多いとされる理由はさまざまに語られている。一般に美人は混血によって誕生しやすいとされるが、福岡はアジア大陸との窓口に位置し、古来、縄文系の日本人と弥生系の渡来人の混血が進みやすかったとされる。

大陸に開けた交易都市では交流の機会も多かったはずだ。福岡市には大陸からの使者を接待した古代の迎賓館「鴻臚館」（こうろかん）があった。福岡は商業都市として成長していく。身だしなみやおもてなしの作法を身に付けた女性を育くむ文化が花開き、女性を一層輝かせるようになったのかもしれない。

そうした生まれつきの顔立ちや歴史的な背景に加え、近年では九州における福岡へのヒト・モノ・カネの一極集中が「美人の宝庫化」に一段と拍車をかけている。人口が増加する福岡市にあって20～30代では一貫して女性の比率が上昇している。2015年のデータでみると20代は男性8万4752人に対し、女性は9万4935人と女性が1万人以上、多い。

若い女性の多さを反映して美容ビジネスが勃興した。少し古いデータだが2012年の福岡市の調査では女性1万人当たりのヨガ教室、エステティックサロン、婦人服の店舗数が政令市のうちいずれもトップだった。「おしゃれな街」の代名詞、横浜市や神戸市をも上回った。

顔立ちの良い、たくさんの女性が競うように自分を磨き上げるのだから、美人が多くなるのだろうか。福岡では実家から通勤する女性も多い。大都市圏で高い家賃を払って1人暮らしをする女性と比べると、外見だけでなく読書や映画鑑賞といった内面の「自分磨き」を含めてお金をかけやすい余裕がある側面もあるだろう。

末弘ヒロ子は、義兄が本人に無断で写真を送り、ミス・コンテストで1位になった。良妻賢母が美德とされた時代、ヒロ子は非難の対象となり、数奇な運命をたどる（結末はハッピーエンドと言っていると思うが…）。

ヒロ子の運命はさておき、現代の福岡の女性たちもファッションナブルなのにヒロ子同様、好んでは自らをアピールすることはないように見える。福岡の女性たちがもっと本領を發揮できる舞台を意識的に整え、発信すれば外国人観光客に対しても唯一無二の福岡の魅力になるに違いない。滝川クリステルの「お・も・て・な・し」の仕草は、福岡の女性たちにこそ、やってほしい。

西日本新聞社業務推進部長 一瀬文秀



日本で初めて一般女性を対象にしたミス・コンテストで一位に選出された末弘ヒロ子。